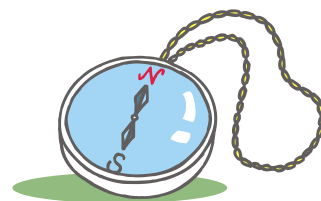


羅 針 盤

第 20 号 令和4年（2022年）10月17日（月）



◆ 「いただきます」について

紅葉の季節が近づき、豊かな自然の恵みを得ることができる「食欲の秋」とも言われる時期がやってきました。生徒の皆さんは、日常の生活の中から「命をいただく」といった意味を考えてみたことがあるでしょうか。食卓に並ぶ食材はどのようにして私たちのもとへと運ばれてきたのか。日々の生活の中で「食べる」ことの有難みといったものを余気にも留めずに誰もが生活をしているかと思えます。私たちはたくさんの「命」をいただいで生きています。タイトルがとてもストレート過ぎて、ドキッとすることも事実で、そのタイトル自体の是非も問われるかもしれませんが、谷川俊太郎さんの詩から生まれた作品である絵本『しんでくれた』が私たちに問いかけていることは、しっかりと受けとめたうえで、考えさせられることがたくさんあるように思います。詩の冒頭部分「うし しんでくれた ぼくのために そいではんばーぐになった ありがとう うし」といった一節も、「死」ということに対してただ悲しんだり、切ない気持ちになったりする、といった内容のものではなくて、生き物は生き物を食べていかなければ生きてはいけない、そして、人間は他の生き物のおかげで生きているということについて投げかけている言葉ではないかと思えます。日頃から食事のときに使う「い

たadakimasu」の言葉に、感謝の気持ちを込めてといったことが感じられる詩ではないでしょうか。普段、食事の時間になると食卓に並ぶさまざまな料理。食べれば私たちの元気の源となり、血となり、肉となり、生きる力のもととなる食事。「食べる」という行為から生まれる、人間の残酷さ、命の尊さ、生きていくということ、などを改めて考えさせてくれる詩ではないかと思えます。「命」をいただくことの感謝の気持ちに気づき、生きていることの尊さを考えるきっかけとなってくれればと思います。フードロスが叫ばれる現代社会に生きる私たちにとって多くのことを学ばしてくれる詩だと感じずにはられません。日々の食事に有難さと「いただきます」の気持ちをしっかりと持ちたいものです。



しんでくれた

詩… 谷川俊太郎

うし

しんでくれた ぼくのために

そいではんばーぐになった

ありがとう うし

ほんとね

ぶたもしんでくれてる

にわとりも それから

いわしやさんまやさけやあさりや

いっぱいしんでくれてる

ぼくはしんでやれない

だれもぼくをたべないから

それに もししんだら

おかあさんがなく

おとうさんがなく

おばあちゃんも いもうとも

だからぼくはいきる

うしのぶん ぶたのぶん

しんでくれたいきもののぶん

ぜんぶ